

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 朴 宣映

本論文は近代韓国語の文章における日本語の影響を検証しようとするもので、その具体的な事例として4つの後置詞表現「-ey 對haye」、「-ey 依haye」、「-ey issese」、「-ey isseseuy」を取り上げている。これらの表現は、格助詞と用言の活用形が組み合わさった表現で、日本語の「-について、-に対して」「-によって」「-において」「-における、-においての」に対応するものであり、従来の研究でも日本語の影響の可能性が指摘されていた。しかし、従来の研究ではその可能性が指摘されるのみで、実際の用例を詳細に分析した研究はなかった。本論文では、19世紀末から20世紀初めの韓国語文献の用例をもとに、これらの表現の生成・定着過程を明らかにするとともに、その生成における日本語の影響を検証している。

論文では、本論の最初に韓国語と日本語における後置詞に関する先行研究を検討するとともに、両言語における後置詞の定義とその位置づけについて考察しており、その中で両言語の後置詞が極めて似た形態と機能を持つことを確認している。

第1章以下では、それぞれの表現について、その生成・定着過程と日本語からの影響を考察している。まず、第1章では、韓国語の後置詞「-ey 對haye」の分析を行うとともに、日本語「-に対して」「-について」との影響関係を考察し、第2章では、後置詞「-ey 依haye」の分析と日本語「-によって」との影響関係、第3章では後置詞「-ey issese」の分析と日本語「-において」との影響関係を、それぞれ考察している。さらに、第4章では、韓国語の属格助詞の複合表現について歴史的な変化を確認した後、後置詞「-ey issese」の連体修飾形の「-ey isseseuy」の分析と日本語「-における・おいての」との影響関係を検証している。

以上の各章における分析の方法はかなりの部分共通している。第一に韓国語の後置詞の生成・定着過程を明らかにするため、まず19世紀末以前の文献で本動詞の用例の検討を行った後、重要な時期である19世紀末から20世紀初めにかけての時期を3つに分け、それぞれの時期における後置詞の用例の出現傾向とその用法について分析を行っている。さらに第二に、後置詞表現の生成が韓国語内部での独自の変化である可能性、あるいは中国語からの影響である可能性を検討するため、19世紀末以前の用例との比較検討や漢文に關係する資料との比較検討を行っている。その上で第三に、日本語文献の翻訳や日本に留学した人の文章と後置詞の用例の關係やそこでの用法の分析から、日本語からの影響の可能性を検証している。

以上のような構成で考察した結果、本論文では次のことを明らかにしている。

1. この論文で取り上げた後置詞表現は19世紀末から文献に見られるようになる。ただし、「-ey isseseuy」は1920年代の文献から見られるようになる。

2. これらの後置詞表現は、その生成過程において以下の3つの共通する特徴が見られる。

第一は、格助詞の取り方の変化である。後置詞での格助詞の取り方は本動詞として使われていたときの格助詞の取り方と異なっている。いずれも対応する日本語の後置詞と同じ格助詞の取り方に变化している。第二は、新しい意味用法の出現である。後置詞としての意味用法の中には、本動詞の意味用法と直接関係ない意味用法が見られ、それら新しい意味用法はいずれも対応する日本語の後置詞に存在する意味用法である。第三は、これらの後置詞の出現初期において、用例が見られる文献に偏りがある点である。用例は『官報』や日本留学生の雑誌など日本との関係が深い文献に集中して見られる。これらのことから、日本語の後置詞表現が4つの後置詞表現の生成過程に大きな影響を与えた可能性が極めて高いことが明らかになった。

従来、十分な検証もなく日本語の影響が論じられていた表現について、近代韓国語の文献の用例を大量かつ詳細に分析し、その影響関係の可能性を明らかにしたことは、この論文の大きな功績であると考えられる。また、語彙レベルでなく、後置詞という統語的なレベルの表現に関して、近代韓国語と日本語の影響関係を論じた本格的な研究はこの研究が初めてであり、新たな研究の可能性を示した点でその功績は大きい。

問題点としては、韓国語の表現と日本語の表現にいくつかの差があるが、その点について十分な説明ができていないこと、近代韓国語における新たな文体の生成過程との関連が十分に明らかにできなかったこと、漢文資料の分析が十分でないことなどが挙げられるが、それらの点もこの論文の学術的価値を損なうものではない。

以上の点から、本審査委員会は、この論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。